創刊の辞

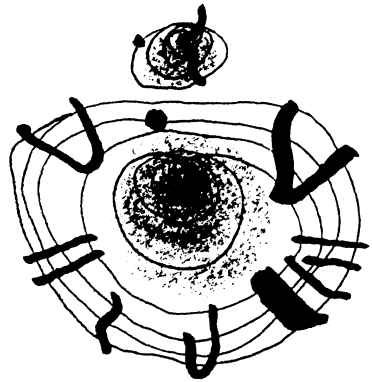
大学大衆化時代を拓く

新村洋史
（東海高等教育研究所長）

一九七〇年代後半、一九八〇年を前後するころから、「大学における教育実践」、「大学における学校づくり」、「大学づくり」が多くの人々の口の端にのぼるようになった。それは、大学の大衆化のなかで、国民にひらかれた大学像にむかって、国民教育機関としての教育研究の実質をうみだそうとする指導理念だといってよいだろう。私たちが東海高等教育研究所を設立するにいたったことも、諸関係者一人ひとりの選択や決意をつつみこんで、この国民的で歴史的な事業に参加することを表明するものである。

この指導理念を実現していくことは容易でなく道のりは平坦でない。大学大衆化時代の現実は、子ども・青年、学生の発達困難にいろどられており、それは同時に私たちを飛躍させるための多種多様な試練に直面させている。

教養志向であれ、資格・技能志向であれ、専門研究志向であれ、すべての学生に共通する根本問題は、自己の社会化を自主的に選択すること（アイデンティティの獲得、自己確立）における客観的・主体的な根拠や基準、それらの内的統合



のふたしかさ、確信形成の困難さである。大衆化した大学教育の役割は、この問題への積極的創造的なこだわり、かかわりをぬきには現実性をもちえない。

世の人々のなかには「大学はレジャーランドか」と揶揄し「そんな大学なら不要だ、どんどん落第させよ」と非難する人がいる。しかし、この種のエリーテリズム（選良主義）の大学観からの批判は非歴史的にすぎる。他方、根は別だが学生教育をあきらめ絶望しかける場面も少なくない。眼前にいる学生によってわが身（教職員）が存在し、この学生たちこそ大学を大衆化している当の主人公であるから、学生の可能性に見切りをつけようとするのもまた歴史意識の欠如による非創造的な自己否定になりかねない。

大衆化した今日の大学の主人公は彼ら学生であり、大学は彼らとともにあり彼らとともに存続する。私たちの歩む道は、この学生たちの自己確立を励ませるような、学問研究・専門教育・教養教育の今日的内実や機能を創造していくことである。この意味で「学生とともにあゆむ」という関係性（学生と大学や教育研究との）を解明し創造するスタンスがつよくもとめられる。

機関誌『大学と教育』は、東海地域内・外に視野をひろげ、大学大衆化への道のりの曲角を本格的に曲りきることをめざし、その教育研究や大学改革の実践・運動を掘りおこし交流していきたい。地に足をつけて「大学における教育実践」という指導理念を共同・共有できるものにしていきたい、と願うものである。